令和５年度　岐阜県幼児教育総合推進事業

第１回岐阜県幼児教育推進会議　会議録（要旨）

日時：令和５年６月２９日（木）１３：３０～１５：３０
場所：岐阜県総合教育センター１棟４階　大研修室

０　岐阜県幼児教育推進会議委員の依頼
１　挨　　拶　　岐阜県教育委員会　義務教育課　教育主管
２　会長選出

〈会長挨拶〉
・　幼児教育の「独自性」を担保しなければならないという強い思いをもっている。幼児教育は「成る」ことを待つ。小学校は、カリキュラムを整えて、教育を「する」。接続期の取組を進める上で、各独自性を大前提としたい。
・　幼児教育は「多様性」に満ちている。領域概念は、花びらのように重なっていて、クローバーのように分かれていない。カリキュラム、時数、教科書、一斉指導というようにカチッと決まったものではない。画一的な幼児教育システムやカリキュラムを作ろうとしてはいけない。
・　１０の姿を、期待される人間像として子供たちに押し付けるのではなく、岐阜県という風土、地域社会の中で、どのように育てていくのかについて、「民主的」な方法で考えていきたい。
・　岐阜県幼児教育推進会議においては、子供の姿を中心に据えて意見を交わし、幼児教育の独自性、多様性、民主制を大切にしていきたい。

〈副会長挨拶〉
・　子供たちのエネルギーが失速することなく、小、中、高、そして将来にわたって、その子らしく、面白さを追求していくような生き方をしてほしいと願っている。そのために、本会議で意見を交わし合い、小学校、中学校の教育にも反映されるとよい。

３　議　　事
（１）　岐阜県幼児教育推進会議の設置について
（２）　「岐阜県幼児教育アクションプラン【改訂版】『ぎふっこ』すこやかプラン」について

〈現状と課題についての意見交換〉
委員：　架け橋期については、具体的にどのように進めていけばよいのか悩んでいた。アクションプランは、現場に働きかけるきっかけとなった。アンケート結果から、誰もが当事者意識をもたなければならないと感じた。
委員：　自分が勤務する地域では、以前は幼稚園から働きかけることが多かったが、「架け橋」の取組が始まって、小学校からの働きかけも生まれ、関係がもちやすくなった。アンケート結果からは、架け橋期のカリキュラムの効果を実感しているのは、幼稚園の方が高く、小学校は低くなっている。
委員：　一母親としての意見だが、年長の下の子が、お兄ちゃんが勉強等大変な様子を見て、小学校に行かないと言っていた。しかし、園だよりを小学校に届ける役を引き受け、校長先生から「待っているね。」と声をかけてもらったことから、「青いランドセルがいい！」と言い始めた。コロナ禍で交流が減り遠い存在になっていた小学校が、近くなったと感じた。

委員：　相談機関では、小学校に入ってからの相談が増えている。幼稚園等では気にならず、指摘されることもなかったが、小学校に入ると不適応を起こし、行きたくないと言い出すという訴えが多い。多様性が認められる幼稚園と、カリキュラム等で決められている小学校との違いについていけない子が多いのだと思う。障がいがはっきりしていない「ちょっと気になるな」という子の引継ぎについて聞かせてほしい。

委員：　アンケート結果によると、半数近い先生が、架け橋期のカリキュラムを実施することに負担を感じている。先ほどの委員が言われたような「素直な子供の声」は届いているのだろうか。「なんとかしたい！」という自分事としての課題意識とエネルギーの中で取組が進められるとよい。

委員：　幼保小の接続に熱心なのは、どちらかというと幼稚園側。送り出す側と受け入れる側との責任を考えると、受け入れる側がもっと熱心であってもよいと思う。また、教職員の資質が課題になっているが、処遇改善により優秀な人材を確保することも課題だと感じている。

委員：　幼保小の接続について、それぞれの施設で行われている工夫を共有できるとよい。０歳児でも力をもっており、保育によって子供たちが変わっていくことを実感している。コロナ禍が明け、再出発となるが、コロナ禍前を知らない職員もいる。３年前と比較するのではなく、小学校との新しいつながりが生み出されるのではないかと期待している。

委員：　コロナ禍の３年間で、相談の機能が弱まってしまった。不適切保育が話題になっているが、これは「独自性」「多様性」「民主制」と逆の現実が、保育現場にあるということである。真に、現場がこの事実を見つめていかなければならない。子供の成長はつながっているので、「成ることを待つ」という姿勢を小学校にも引き継いでもらいたい。

委員：　市の子育て会議の中で、あちらの市は学校の関係者が参加するけれど、こちらの市は参加しないという意見が出た。市町村間の差について、どう取り組んでいくか考えている。

委員：　幼稚園と小学校の両方に訪問している。両者間に違いや段差があるからこそ、行政としてつなぐ必要性を感じている。幼稚園の先生方には、幼稚園で取り組んでいることを、もっと伝えてほしいと依頼している。当市では、発達支援についてデータベース管理している。確実に引継ぎができるよう体制を整えている。

委員：　４月より小学校の校長を務めている。５月の校長会で、幼稚園の園長の講話があった。映像や写真を交えて幼稚園での子供たちの様子を紹介された。形式を整えるだけでなく、実質的なものをどれだけ積み上げられるかが重要である。架け橋プログラムも、負担に感じるようなものでは長続きしない。うまくいったエピソードもうまくいかなかったエピソードも集めていく中で、接続のノウハウが見えてくるのではないか。

〈事務局より〉

・　当課の所管する事業、研修等の機会を活かし、園・小学校間の意識の差を埋めるよう努めたい。生成ＡＩについてガイドラインが策定されるとの報道が出ている。体験を通して習得すべき知識や技能を、生成ＡＩで代替すべきではない。幼稚園での遊びや小学校での生活科等、体験を大切にしていかなければならない。

（3）　「岐阜県幼児教育アクションプラン【改訂版】『ぎふっこ』すこやかプラン」に基づいた「つなぐ・高める・支える」幼児教育の推進に向けた関係事業・研修について

〈関係事業・研修の内容や進め方等についての意見交換〉

委員：　綿密に研修が組まれていることが分かった。しかし、保育所、認定こども園の職員はキャリアアップ研修を受けないと、処遇改善が受けられない。例えば、特別支援に関する研修を受けたいと思っても、キャリアアップ研修を優先せざるを得ない。また、家庭教育学級と園の子育て支援機能との住み分けもよく分からない。こども家庭庁となっても、旧来の文部科学省系の仕事と厚生労働省系の仕事が十分に整理されておらず、混乱している現状がある。

委員：　架け橋プログラムについて、当初は、公私立、施設類型が様々な中でうまくいくのかと心配された。しかし、昨年度、指定地区の一つである市の教育長から、「幼保小のつながりが生まれて、先生たちが喜んでいる。本事業を受けてよかった。」と言われた。研修の基本は、子供たちの姿で語り合うことである。幼児に触れている先生と語り合うことで、児童のつまずきの要因に気付くこともある。連携はやらなければならないこと。いろいろな立場の方が参加される本会議の充実は大変重要である。

〈事務局より〉

・　各研修について、受講しづらい状況があることが分かった。目的等を精査するとともに、他課とも連携できることがあるか検討したい。

〈会長まとめ〉

・　接続期カリキュラムの開発について、無理をせず、指定地区（園・小学校）の素敵な取組を活かし、広めていく。

・　幼児の育ちを待つように、先生方についても経験を積み重ねていく中で育っていくのを待つのも一手。１、２年経験しないと、大学の講義で聴いたことが落ちていかないのではないか、研修等が盛りだくさんすぎて疲弊してしまわないか、と心配。機械的に受講させることで、先生のモチベーションが育たないことも考えられる。体験があってこそ知識を付けることができるのであって、失敗しそうだから失敗しないように知識を付けるというのは、失敗することが許されず、大変だと感じる。あと少し待ってあげられるといいのではと思った。

４　事務連絡

（1）　第２回岐阜県幼児教育推進会議について

日時：令和６年1月３１日（水）１３：３０～１５：３０

（2）　債権者登録について